脱ひきこもり支援

ファーストステップ・ジョブグループ

FSJG

2002年～2012年

１０周年記念　活動報告

ご挨拶　　＜ 10 年を振り返り、そして今後に向けて ＞

代表　上田　陽子

ファーストステップ・ジョブグループ結成１０周年を迎え、私たちファーストステップ・ジョブグループ（FSJG）の活動にご理解とご支援とご協力をいただいています皆さま方に心から感謝申し上げます。

2002 年、上田の“ファーストステップ・ジョブグループの提案”に賛同した当事者家族で「このような支援が社会にないのなら、自分たちで創っていこう」と結成しました。結成当初は親子５組で、「親と子でつくる ひきこもり援助グループ」と表記していました。そのため、度々、受容・共感を主な目的にして集う当事者グループとの違いを「脱ひきこもり支援」を用いて説明しなければなりませんでした。FSJG の存在を広く知っていただくようになるに従いそのような誤解もされなくなりましたが、10 周年という節目を迎えるにあたり、「脱ひきこもり支援」と改めて表記し、本冊子表紙から新たなスタートです。

この 10 年間の活動においては一定の成果をあげています。その成果は私たちに FSJG をつづけていく喜びと励みを与えてくれます。この機会に、原点に戻る、戻って振り返ることの大事さを感じ、活動報告冊子を発行することにいたしました。これまで自主講演会や招かれての講演会、シンポジウム等での報告、発言は代表上田のみが行っていました。それはいつも内部の同じ一人から発せられるものとなります。そこで今回は、連携先の皆さまから観た FSJG、グループ外の当事者家族の方から観た FSJG、第三者の方から観た FSJG、そしてメンバーそれぞれの FSJG、このように多角的な視点からの報告にまとめてみることにいたしました。１０年間の成果を客観的な形で報告でき、さらに批判も得られ、それによってより良い援助を展開していけるのなら、それは FSJG の基本的な姿勢に沿うものと考えています。

尚、「仕事成立への援助」はさまざまな関係者の方々との連携が不可欠です。活動をご理解くださり、「仕事」の提供いただければ幸いです。さらに、さまざまな就労形態が認められ、就労形態によって不利を被らない、このことは「ひきこもり」に限らずさまざまな困難を抱える多くの人たちの就労についてもいえることです。社会に向け要請していくことも援助の一環と考えます。その実現に向けてご支援いただけますようお願い申し上げます。どうぞ今後とも、よろしくお願い申し上げます。

目次

挨拶・・・

ファーストステップ・ジョブグループ（ＦＳＪＧ）の概要

活動における支援の方針

人を援助する際の倫理：「与えられる」（given）ことでなく「得る」（get）ことができる条件設定で援助することで、「援助される人」「できない人」として一方的に与えられるのでなく、本人が自分で「やった」という気持ちでできるように援助することが大切だと思います。この「自発的に行動できる」ことを生活の質の目標の基本と考えています。

援助における目標：一人ひとりの個人において「やりたい」と思える行動を成立させ、さらにその選択肢を増やすこと（行動の機会を創り、その機会が拡大していくように）を援助するというものです。

「個人と環境との相互作用」という視点：個人の側を変えて現実環境に適応させていく治療的な「医学モデル」でもなく、社会制度といったマクロな環境による「社会モデル」でもなく、二項対立的に捉えるのでなく、行動を「個人と環境との相互作用」として捉え、その関係としての行動の成立を援助していこうというものです。従って、一人ひとりの個人の行動成立のためにどのような環境整備をすればよいかを考え実践しています。

目的と運営方法

〇ひきこもり当事者本人と親とで構成され、親が中心になって活動しています。

〇長期化した「ひきこもり」を対象に社会参加に向け自発的な行動を促していくことを目的としています。

〇当事者本人の「できる」行動に注目し、それぞれの可能性のある「開かれた社会」の中で、より良い方向に向け行動の選択肢が拡大するように具体的に考え取り組んでいます。

〇そこで、今を認める、今できる行動を認められる環境を創る、具体的には今ひきこもりのままでもできる「仕事」を創出し、「仕事をする」行動の成立を援助していこう―と考え実践しています。

〇社会的関係　―「仕事」という行動を通じて社会と関係をもつ―　を、今、実現するための援助です。

〇グループ内仕事から始め、グループ外仕事へと範囲を広げていきます。選択肢の拡大、行動の機会の拡大となり、さらなるジョブへとつながるように継続的に援助を展開しています。

ファーストステップ・ジョブグループ（ＦＳＪＧ）の活動

ひきこもりを取り巻く状況

「ひきこもり」が社会的に注目されて１０数年になります。この間、「ひきこもり」に関するさまざまな議論および支援が展開されてきました。しかし、必ずしも系統的かつ実効的な支援方法や、多様な支援方法が示されてきたわけでなく、適切な支援はいまだ数少ないと言えます。

そして今、さまざまな困難を有する若者に対する支援の必要性や、さまざまな困難を抱える人たちに対する就労支援の体制作りが議論されてきていますが、そこで用意される場まで出向けない、さらには提供される支援と必要とする支援と合致しない当事者は、かえって取り残されることになり、より長期化・高年齢化していくことになります。

既存の支援の届かないところで苦悶する当事者本人、および、こうした長期化した「ひきこもり」を抱え、具体的な打開策を得られないまま悩みつづけている家族がいまだ多く存在します。

活動内容

援助する際、一般的には、個人の側を変えて現実環境に適応させる訓練がなされます。「ひきこもり」の場合も、現実社会に適応できないと捉え、「できない」に注目し、訓練を受けることで社会性を身につけ、その上で世の中に出ていこう、という方策がとられます。しかし、FSJG では、援助の目標である当事者本人の「やりたい」と思える行動を成立させていくために、「今できる」行動に注目し、「ひきこもりのままでできる」行動の機会を創ろう―それには「今ひきこもりのままでできる」行動を認められる環境を創ろう―具体的には、今ひきこもりのままでできる「仕事」を創出し、「仕事をする」行動の成立を援助しています。

なぜ「仕事」なの？「仕事をする―対価を得る」ということは個人と社会との交換関係です。また、仕事をするということは、一方的に“与えられる”のでなく自分の力（なんでも自力ということでない、援助つきで良い）で“得る”ということ＝生活の質の目標の基本であり、活動における援助の方針と重なるものです。さらに、ひきこもりだから「できない」のでなく、長期化するうちに失われてしまってるだけかもしれない、「できる機会がない」からできないだけかもしれない、このように自発的な行動の機会が提供されていないということを本人たちの生活から窺い知ることができます。

FSJG の仕事とは？　したがって、就労に向けての訓練ではありません。治療的活動でもありません。ひきこもりのままでできる社会的行動としての「仕事」です。「やってもやらなくてもいい、途中でやめてもいい、休んでもいい、当日キャンセルも OK」と提示した仕事です。言い換えれば本人が決めることを徹底的に尊重した状況の提供です。

活動の基本は、「ひきこもり」当事者である親と子でジョブユニットを作り、“親”が創出（あるいは受注）した仕事をグループのよその“子”に提供し、報酬はグループから支払います。

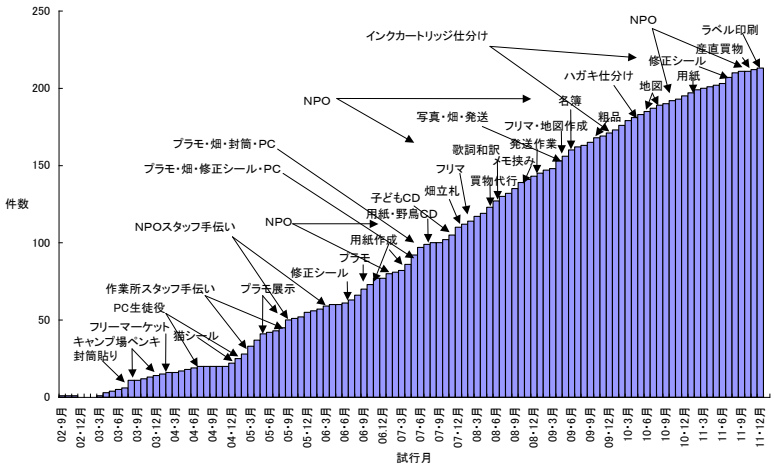
●具体的な実践方法

毎月定例会を開き、個々の当事者本人についての報告と創出（あるいは受注）した仕事内容について全員で検討しています。また、３ ヵ月毎にすべての課題について振り返り見直しを行っています。メンバーはそれぞれ運営上の役割を担っています（代表・上田陽子、副代表・高木千佳子、会計・郵便・広報・会場・畑係りなどは年度毎の輪番）

仕事提示から仕事成立までの手続きは、創出仕事や受注仕事を「仕事メニュー」にして当事者本人宛に毎月定期的に郵送します。→本人はメニューの中の「やってもいい」と思う仕事を選択します。→選んだ仕事をさまざまな援助つきで実行します。→報酬を得ます。報酬は本人宛に、即、現金書留で送ります。ここまでをもって仕事行動成立としています。

仕事メニューの提示方法には重要なポイントとして“繰り返し”と“否定の選択肢”の２つがあります。「繰り返し」は繰り返し選択の機会を提供することになります。また、それによって本人は FSJG のシステムを理解していくことになります。仕事メニューには「今はやりたくない」「返事をしたくない」「この方法に参加したくない」という「否定の選択肢」も提示しています。「否定の選択肢」は、否定することを保障することで、本当に本人が望んでいることなのかを本人が表明しやすいように工夫し確認する方法としてのものです。「本人が決めることを尊重する」援助を展開する上で重要になります。

「援助つきで実行」の“援助”は、「ひきこもりのままでできる」仕事を成立させるために環境を整えることすべてを指します。例えば、「朝早く起きられない（通常の始業時間に間に合わない）」の援助としては、「昼からでもOK だよ」、あるいは本人が起床できる時間から逆算して始業時間を設定するということです。実際に、このように設定されたなら、本人たちは普段より早目に自発的に起床しています。言うまでもなく仕事行動も成立しています。



グループにおける仕事行動成立の推移（累積グラフ）と主な仕事内容

仕事内容は、他家の家事手伝い、他家からの内職、見合った創出仕事、外部からの提供仕事、外部施設利用仕事、外部仕事といったように拡大していきます。同じ仕事であっても、週単位から月単位の仕事へと拡大していくことも、個々の本人によっても違います。すべて個別的です。さらに個々の状況によっては自宅の家事手伝い（風呂洗い等）から始める場合もあります。

結成当初はグループ内仕事がほとんどでしたが、2004 年にはユースサポートネットとも、2005 年にはきょうと NPO センターと連携し、1 名がそのグループ外仕事を選択し行くことになりました。翌 2006 年にこの 1 名が卒業しました。以後昨年までにグループ外仕事を経由して 5 名卒業しています。単純にいえば、きょうと NPO センターとの連携後、ほぼ毎年 1 名卒業していることになります。FSJG の卒業とは、FSJG 仕事以外の「仕事」に当事者本人が自発的に参加するようになった時点です。「復学」もいつでも認めています。また、自発的な社会参加という意味では「就労」に限らず、「就学（学びの場）」を選択した本人もいます。

グループ全体の仕事行動成立の推移と主な仕事内容についてはグラフで示しました。このように援助の試みと成果の関係について表現することは、数値そのものでなく、どのように変化していったのかを検証し、さらにより良く実践していくために必要と考えています。

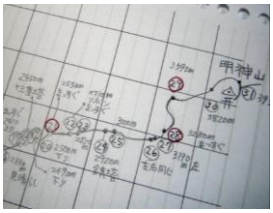
ジョブグループであることは、仕事の交換は、閉鎖的な関係（個々の親子では焦りがち）を必然的に越え、余裕をもって対処できます。また、「グループ」の成果という形で評価、激励していくことができます。お互いの援助行動に対して称賛、励ましなどで支えあうことができます。

親が援助者であること・仕事行動成立の援助であることは、親が援助することについては懸念される課題（客観性、データの信憑性、親子密着、子のプライバシー）があります。FSJG では、そのような問題点を踏まえた上で、今、一番近くにいる、今、唯一接触できる社会資源として“親”を利用しようと考えたものです。一方、「仕事行動成立への援助」は多くの関係者との連携が不可欠です。それは、さまざまな関係者が参加しやすく、援助者（親）が援助行動を見直す機会になります。よって懸念される課題は乗り越えられることになります。このように本来、第三者が

介入しづらい状況を、個別の推移を客観的に表現していくことが困難な状況を、「親が援助者であること」「仕事行動成立の援助」は可能なものにします。子のプライバシーに関しては、プライバシーと情報公開という背反する問題はどのような対人援助場面でも起こるものです。すぐに答えのでるものではありません。本人の利益を最優先させながらその時時に思考重ねながらいくものと考えています。

●講座と FSJG

ひきこもり家族対象の勉強会を 2006 年、2008 年からは毎年開催しています。個々の家庭内での対応を学ぶ連続講座ですが、受講者同志で FSJG 的グループ結成に向けての動きや FSJG 的方法を取り入れる親の会や親御さんが現れてきています。FSJG 的グループがあちこちにでき、ひきこもり支援が充実していくことを願い、「講座」と「FSJG」との両面で援助を展開していきたいと考えています。



●NPO との連携

連携とは、継続的に支援していくことで、グループ内仕事を卒業したからグループ外仕事へ引き渡す・引き継ぐという分担ではありません。「何ができるか」「どうやったらできるようになったか」の認識を共有し蓄積し、目標に向けて「今できること」を認める環境を、職場（NPO）の日常場面（がっちり組まれた訓練ではない）において仕事の提供として、創っていくという援助を“きょうと NPO センター”では展開していただいています。

「使用済みインクカートリッジ仕分け作業」を協働で行っている“NPO 法人テラ・ルネッサンス”では、この作業に本人たちが参加しやすいように時間設定をしていただいています。作業によって得られたテラ・ルネッサンスの活動資金がウガンダ元少年兵社会復帰支援等につながるということは、ひきこもりのままでも世界とつながることができるということです。活動分野が違っても連携可能であること、行動の機会の拡大であることを実感しています。

最初のグループ外仕事（作業所スタッフ手伝い）を提供していただいた“NPO 法人ユースサポートネットとも”からは、昨年より支援事業所のカフェ＆ギャラリーを利用してのサロン（茶話会マチナカ）の場を提供していただいています。このサロンは、私たち FSJG のほうから地域に出て、一歩踏み出せないでいる家族の方が容易に参加できるように、いろいろな関係者の方が自由に参加できるように、と考え開いています。

この三つの NPO 法人以外にも、個人、大学、機関等から協力を得ています。

●さらなる社会資源との連携

グループ外仕事、「仕事成立への援助」は様々な関係者の方々との連携が不可欠です。複数のグループ外仕事があれば、選択肢をより広げ本人たちに提供することができます。それは自発的行動の機会の拡大となります。そして、それがさらに次なる仕事へとつながることになります。そのためには個人、団体、企業などの社会資源との連携が一層必要になります。さらに開発していきたいと思っています。

FSJG の次なる仕事、グループ卒業後の次なる仕事です。この仕事に関しては、いろいろな就労形態が認められ、就労形態によって不利を被らない、ということにつながるものです。それは「ひきこもり」に限らず、他の障害をもつ人、幼い子を抱える母親、さまざまな困難を抱える人たち、他の多くの人たちの就労を考えたときにも言えることです。それを社会に要請していくのも支援の一環として考えています。

連携先の皆さまからの声

＜「治す」のでも「待つ」だけでもない FSJG ＞

立命館大学文学部 ／ 応用人間科学研究科 教授　望月 昭

FSJG の関係者の皆様、活動 10 周年おめでとうございます。この 10 年といえば、世間における「ひきこもり」という事象に対する捉えかたや対処方法のモデルも、医療的なものから社会的なものまで様々に変容してきました。しかし、いずれのモデルにせよ、いざ個別の「ひきこもり」の対応として、とりわけ長期にわたった「ひきこもり」に対する支援を、果たして誰がどのように行うか、そしてどんな方法が有効かということについては、なかなかこれという方法論がありませんでした。

これまでは、親御さんなどが「専門機関」なる場所に相談に行っても、心理的な専門家からは「ともかく、受容しなさい」といった抽象的なアドバイスをもらい、現状をいたずらに継続せざるを得なかったり、あるいは「こういう『居場所』があるので本人に参加させたら」と勧められて、しかしそもそも家から出られないのにどうやって本人を参加させたらよいのか途方にくれるといった状況が長く続いていたわけです。

FSJG は、そうした閉塞的な状況の中で新しい道筋を見出したグループです。その武器は、まずは「（ひきこもっていても）今できる仕事（ジョブ）を成立させる」という新しい視点です。「ひきこもり」という事象を、「出られない家」と「出るべき外（社会）」という二分法で捉えることを止めて、「仕事（ジョブ）をしない」「仕事をする」という別の視点からアプローチしなおしたわけです。そして、従来の「家から出す」というための支援ではなく「家でも仕事ができる」ための支援のほうが、多くの「ひきこもり」当事者やその家族にとっても実践可能であったことが示されたわけです。そこでは、当事者が複数のジョブ選択肢から自発的に「選ぶ」という設定の導入も、「仕事」（ジョブ）であったからこそ、当事者にとっても家族にとっても、最初にできる第一歩（ファースト・ステップ）を可能にした大きな要因だったと思います。しかしそのような視点の変換はなかなかの力技です。それは当事者家族だからこそ難しいところもあります。そのような視点の変換には他者のバックアップが必ず必要となります。FSJG という当事者家族によるグループとしての役割はまずはその「視点の変換」を相互に支え合う点にあったと思います。

そして、家庭内ジョブの延長として家族同志の仕事交換、次に外部からの受注仕事、そして最後に当事者も外での仕事という展開において、様々な関係者や機関の協力を得ることが実現してきています。この FSJG の歴史は、代表の上田さんも院生としてまた研究員として参加してきた立命館大学における「対人援助における融合と連携」に関する教学やプロジェクトと併走してくれたもので、まさにその代表的な実践例と新しい支援組織の実装の可能性を社会に示したものといえます。

「支援」ということについての前記したような「視点の転換」を含め、「ひきこもり」に限らずこの領域に投げかけてくれた示唆は極めて大きなものであると思います。「治す」のではなくまた「待つ」だけでもなく、当事者の選択した行為を協同的に支援する、というまさしく「対人援助」のひとつの基本的方法を実現したものといえるでしょう。

＊プラモデル：ゆう（FSJG メンバー）作

＜ 社会資源につなげる ＞

立命館大学産業社会学部 ／ 応用人間科学研究科 教授　　中村　正
特定非営利活動法人　きょうとＮＰＯセンター　理事長

京都らしさはNPOが守っています。舞妓さんがいきかう祇園の街なみ保存と修復、真夏の京都のシンボル「五山の送り火」の維持、うなぎの寝床といわれる西陣の町家、高瀬川沿いの灯りと木屋町・先斗町の安全を守ること、哲学の道に連なる法然院が演出する市民版「入会地」の創出、華と茶の道を極める家元文化なども非営利活動が支えます。これらに新しい市民活動を接ぎ木したいと思いました。そのためにきょうとNPOセンターを開設したのは1999年です。阪神淡路大震災の後のことです。地域の課題をみいだし、自発的に動き、人と人との新しいつながりをつくりだし、市民としての「自立と共生」を担うNPOが活発になることこそが、地域再生・活性化の一つの方策だと考えたのです。2011年の東日本大震災後にもこれらの活動が活かされているように思います。

こうしたNPO活動は「新しいつながり方の創造」を使命とします。ソーシャルネットワークといういい方があります。人と人のつながりは社会関係資本ともいわれています。さらに工夫したことがあります。たんにボランティアではなく社会的事業体をつくりだしながら、それで賃金を得て、生活できるような領域としていくためにNPOを位置づけることです。働く場にならなければ若者が定着しないと考えたのです。新しいつながり方を求めていた若者たちが社会問題の解決を事業体の活動をとおして行うことができることをめざし、そのための持続的な組織体としてNPOを位置づけてきました。その後、実に多様なNPOが誕生しました。

こうした過程をみると、脱ひきこもり支援の新しいかたちのデザインづくりに協力するのはとても自然なことでした。若者たちがこれまでにない社会的価値を創造し、持続可能な社会の主人公となるために、働き方という点で多様なスタイルとそれを可能にするシステムを構築しようとしていたのですから、そこに＜仕事＞を中軸にした脱ひきこもり支援をステップ化していこうとするファーストステップ・ジョブグループの志向性はまさに合致していたのです。両者は出会うべくして出会ったということになります。

若者の成長と新しいつながり方の創出を＜社会＞への参加と事業体の創造というフェーズにおいて同期させることでNPOを進化させようとしてきたのです。＜仕事＞は＜社会＞の具体化されたものです。＜社会＞を成して生きるということは、各人の「できること」をつなげて組織的な活動の流れに加わることを意味します。これは「参加」という意味です。貨幣的な報酬もあれば、喜ばれるという感情面の満足感も得られるし、次回の計画を立てて明日へとつながります。しんどい時は休みを取ります。その人にあわせて＜仕事＞を切り出すことで適材適所となります。こうした一連の活動に関与することこそが＜社会＞に関わることを意味します。別の言葉でいえば心理主義化しない援助の場面をつくりだすともいえます。あくまでも「参加と自立のデザイン」なのです。でもそこには考え抜かれた黒衣のように作動する、それが支援として機能する環境となるように準備するコーディネーションや人の配置を考えるコンサルテーションなどが要るのです。仕事をする小さな＜社会＞の場の設定とそれが援助的な機能になるような援助者の役割やそのための支援の理論、当事者とその家族の参加・参画により得られる市民性と心身の健康が一体となったミクロコスモスとしてのファーストステップ・ジョブグループは実に見事な社会事業体だと思います。その一画を担う社会資源をたくさん開発していきたいものです。

＜ 社会資源としての私たちの役割 ＞

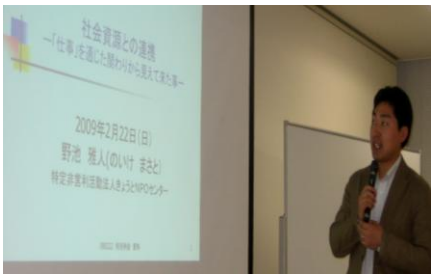
特定非営利活動法人
きょうとＮＰＯセンター　事務局長　　野池　雅人

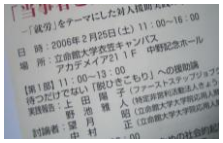
きょうと NPO センターでは、2005 年から現在にいたるまで FSJG を通じて５名の長期ひきこもりの方々に、仕事の機会を提供してきました。早いもので７年が経とうとしています。私たちはひきこもりの支援機関でも、居場所でもありません。仕事を通じて、仕事場の仲間として関わってきました。結果的に、多くの方が当センターでの仕事を卒業し、次のスタートをきる事ができました。また１名の方は当センターの職員として採用し、今も継続して働き続けています。

私たちの役割は非常にシンプルだと思います。本人と FSJG の方々と会って話をしながら、本人の関心や現在の体調、持っているスキル等を確認し、それぞれに応じた仕事内容や仕事の環境づくりに取り組むということです。当センターのスタッフと同じように週５日８時間といった働き方を求めるようなものではありません。週１日１時間からでも OK、当日キャンセルも OK、人目が気になるので帽子をかぶって仕事をしたいという方や、長い爪を切ることができないのでこのままでもいいかということも基本的には OK です。大切にしていたことは、できる限り、私たちの職場に本人の状況をあわせてもらうことではなく、今を受け入れ、本人の状況の中で今できること、できる方法を自己決定し、そこからスタートしようということ、そのために私たちが仕事をどのように創出できるか、環境設定をするのかということでした。例えば、これまで一人のスタッフがやってきた新聞記事による情報提供の仕事も、「新聞を読み、関連記事をチェックする」「チェックした記事をきる」「切った記事を台紙にはる」「テーマや分野ごとにわける」「フロアーに開架する」など分解すれば、１ 時間でもできることがあるのではないかと考えました。

個の支援でもなく、教育、授産施設でもない職場ですから、治す、変える必要性も私たちには有りません。「今、できること」「今、できるやり方」に徹底的に目を向けていくことにこだわっています。

こういった取組みを通じて思うことは、ひきこもりの方の就労問題というよりは、私たちの側の「労働」、「働く」という価値観のとらえ直しにつながっているということです。これまで働くことに困難を抱えていた、子育て期の母親、障がいをもつ方、高齢者の方、うつの方などが、再び社会との関わりを取り戻すためには同様の支援や働き方のデザインが必要であると感じています。これからも FSJG とともに、長期ひきこもりの方々に仕事の機会提供を続けつつ、FSJG が長い時間をかけて培ってきた「参加と自立と働くデザイン」を広く社会の中に提案・波及をさせていきたいと思います。FSJG の次の 10 年、さらに新たな展開をともに創っていきたいと思います。





＜ 引きこもり時代を生き抜く FSJG ＞

特定非営利活動法人
ユースサポートネットとも　運営委員長　　前田　ハル子

FSJG の皆様、十周年おめでとうございます。十年が経過したということには、私のように壮年期になりますとつい時の経過を強調し一種の憂鬱を感じてしまいがちになるのですが、FSJG の場合は何故か青年期の学生が経験する「卒業」（上田さんが良く使われる言葉ですね。）の言葉のイメージに感じる慶びと希望と期待と愛情が詰まっているので、喜ばしいかぎりです。

今、当 NPO 法人に在る障がい者就労支援事業所のカフェで FSJG の京都での定例茶話会を毎月第二木曜日の午後に開催して頂いているのですが、当初は参加者が確保できるかどうか危ぶまれましたが、最近は毎回狭いカフェがいっぱいになる雰囲気で三時間ぶっ続けで笑いと涙が絶えない劇場になってます。そうすると、外からカフェへの一般のお客様も何故か引き付けられコーヒーを飲みに入店されることも実際にあるのですから、人生は何時もドラマになるのですね。

FSJG さんとの最初の接点は、長期社会的引きこもりの方に何か当 NPO 法人から機会を提供できないかというあるおせっかいから始まったのですが、結果的にそれがその方の社会参加に繋がったことはあらためて分析に値します。週一回のたった三十分程の活動で、タイムカードとロッカーを提供し、あとは午後の時間の３時ごろ・・というアバウトな時間での出勤でも差支えない単独の雑談無用の作業（配食弁当箱の洗い）の提供でした。何が功を奏したかと言えば、「（当 NPO 法人が存在する）繁華街に出掛ける」という潜在的魅力と、プレッシャーを可能な限り縮小した「お手伝い」の範疇の活動が、FSJG のコンセプトである「親が提供する仕事」の延長として連続性があったからと思います。この時点では社会参加の最初の一歩としての機能はまだ無く、そのエピローグを演出できたのだと思います。その後数か月～半年を経て、彼は公の場でのボランティアへと、現在はアルバイターをへて正規スタッフへと成長し FSJG を卒業されたことをお聞きすると、勝手なおせっかいに込めた愛情がエンパワーメントに繋がったことでの「親」のような感覚を味わいました。

仕事柄、1983 年～2012 年の今までに不登校や引きこもりというカテゴリーで括られる多くの青少年の過程と接してきましたが、怠学、家庭内暴力、非行、学級崩壊、学習障害、引きこもり、ニート、虐待、発達障害、貧困青年…等々の社会的表現と精神科的診断の変遷によって彼らは翻弄された被害者かと思います。一方、このような荒れる時代に潰されることなく親子でタッグを組み、この変遷を行き抜いてきた FSJG の皆さんは時代の寵児とも言える親子かもしれませんね。教育でも無く、治療でも無く、支援でも無く、政策でも無く、表現でも無く、使命でも無く、・・・時代が流れるように次の過程を模索するそんなパワーを FSJG に私は感じます。

私は無宗教ですが、時は、日一日のパワーに感謝しながら、継続性が保たれることを基本に、新たな機会がやってくることを期待しながら過ごしたいと思います。FSJG の皆さんとご一緒に・・・当事業所の Café & Gallery アトリエともでのフェアトレードコーヒーを味わいながら・・・。

＜ 社会を変えるファーストステップ ＞

特定非営利活動法人
テラ・ルネッサンス　国内事業部部長　　栗田　佳典

774,080 円。2011 年度にテラ・ルネッサンスに届いた使用済みインクカートリッジの換金額。これはウガンダの元子ども兵社会復帰支援センターの給食約 15500 食分にあたります。この成果は、全国で使用済みインクカートリッジの回収をしてくださった方々のご協力と、その成果を出すため、縁の下の力持ちとして、とても重要な役割を担ってくださった FSJG さんあってこそのものでした。

テラ・ルネッサンスでは、地雷・小型武器・子ども兵という密接に関連し合う３つの課題に対して、カンボジアでの地雷撤去支援や地雷被害者を含む貧困家族の生活再建プロジェクト、ウガンダやコンゴ民主共和国での元子ども兵社会復帰プロジェクトなどを展開しています。テラ・ルネッサンスの京都事務局には講演やインターネットを通して私たちが取り組む活動に賛同してくださった方々からのたくさんの使用済みインクカートリッジが寄せられます。使用済みインクカートリッジは、提携しているリサイクルトナー販売会社に、重さに応じて買取金額が決められている「重量買取」と、メーカー別、タイプ別に集計する「個別買取」のどちらかの方法で買い取っていただきます。「個別買取」の方が買取金額が高くなるものの発送の前に種類別に分ける作業を行う必要があります。協力者が増え、私たちのスタッフだけでは、その作業が追い付けなくなったその時に、ご縁をいただいたのが FSJG さんでした。

FSJG さんと協力を始めたことによって、重量買取のものが個別買取となり、換金の合計金額が増加しただけでなく、支援に対する報告がより早くできるようになりました。それにより、「こんなにたくさんの協力ができて嬉しい、また集めます」といった声も聞くことができ、支援者との関係がより良くなり、さらなる支援につなげることができています。

また、使用済みインクカートリッジの仕分け作業だけでなく、書き損じハガキの仕分け作業や、発送資料のラベル貼り、イベントで使用するくじ引き用のボックスの作成や、資料の修正テープ貼りなど、発送業務からクリエイティブな作業まで多岐に渡る業務に協力いただいています。猫の手も借りたい時に、確実に作業をこなしてくださる FSJG さんのお力は大変ありがたいものです。私たちの救世主と言っても過言ではありません。

FSJG さんと連携を始めて、2012 年６月で２年半、協働を通して１名の方の「卒業」へつながった経験を胸に、社会参加へのファーストステップだけではなく、社会を変えるファーストステップにもつながっているこの活動をこれからもFSJGの皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思います。

Terra Renaissance

当事者家族の声

ＦＳＪＧメンバーの声

講演会に出席し、その後お願いして、例会見学。皆さん　パワフル！でした。
惹かれるものがあり、一心に通いつめ３ヶ月。念願のメンバーの一員に。
が、喜んでばかりはおられません。まずは　教わった「観察」から、実践。
本人の今が、良いところが、見えてきました。目から鱗の日々、目下、修行中の私です。（楠本）

これまで、色々な援助団体を経験して、「親が変わらなければ、子どもも変わらない」と言われても、具体的にどうすれば良いのか迷うばかりでした。子どもへの対処の仕方に戸惑う毎日でした。
FSJG では、今できることを認めるために本人のできることを見つけることから始め、子どもと向き合う自信が出てきました。そして気がつけば親が変わっていました。次は、できる行動の機会を創ることです。（丸山）

最初の「FSJG の提案」に賛同し参加しました。親のいやしの会ではなく、当事者本人のできないことに目を向けるのでなく、今できることに目を向けようという今迄と全然違う視点で本人と向きあうのです。とても新鮮でした。今が「〇」、ここが「いつでも初めの一歩」と捉え実行し、回を重ねるごとに援助活動そのものが楽しくなってきました。我が子でなくても、よその子であっても、一人の進歩を皆でよろこび合いました。
家事手伝いから、グループでする仕事、外へ出向く仕事と、本人の選ぶ仕事も広がっていきました。社会の中で他人と共に働くことで社会の一員としての喜びを感じているように見えました。長いブランク故のしんどさもあったでしょうが、「認められた」「役に立った」「できた」と自信や喜びや達成感をきっと得たと思います。親の私も嬉しかったです。
このような仕事（グループ外仕事）さえあれば、本人たちの社会参加の機会を創ることができると強く思います。連携先の皆さまへ感謝するとともに、いろいろな方から仕事を提供していただけますよう願っています。（篠浦）

我が子のできたことを半信半疑で例会で報告すると、グループのみんなが「よかったね」「それでいいよ」と一緒に喜び、親の私をも褒めてくれました。それが親の自信につながり、それによって、これまで否定的に捉えていた我が子のことも肯定的に捉え直しできるようになりました。このように親がお互いに称賛しあったり励ましあったりして支えあい、「今を認める」ということを理解し、子への援助の力をつけていくことができています。（森川）

ひきこもりも１０年近くとなり、どうしたらいいのか本当に困り果てていた時に FSJG に出会いました。今までにない実践的な考えに基づいていて、すぐ入会しました。毎月の例会では、メンバー同志がアドバイスしあい、自分の行動をチエックする事ができ、とても有意義です。毎年行われる勉強会では、メンバーも学び直すことができ、グループだからこそできることがたくさんあります。
本人は、FSJG の仕事をして自信と社会へ出る喜びを得て卒業し、今は元気に働いています。私は、新しく入ってくる人たちに先輩親として得たものを伝えていきたいと思ってグループに残り活動をつづけています。また、活動を通して得たものを関係者の方に話すことも、成果を社会へ還元することの一つで大事だと思っています。（立田）

＊似顔絵：日光（FSJG メンバー）作

既存の支援に疑問を持ち、自分で動かなくてはという思いで模索しているとき、FSJG の提案に出会い、こういう具体的な提案を待っていたのだと、立ち上げに参加し、以来 10 年、私の選択は間違っていなかったと思っています。必要かつ具体的に実践できる支援として、社会参加を目標に、できることに着目し、今を認める、環境を整えることで、「いつでもはじめの一歩」をサポートしていくということを続けてきました。それには社会資源としてのたくさんの人とのつながりが大きな力となっています。大変感謝しています。一つの支援活動としてとどまることなく、FSJG 的支援が普通に存在する社会になることを願って、これからも活動していきます。（高木）

共感し話し合える場所のある有り難さ、学べる場所のある有り難さを実感しています。その延長で家の中の雰囲気まで重いから軽いへと変わります。子の今を認めることの大切さを毎日の生活で感じています。みんなと一緒に一歩づつ一歩づつ進みたいと思っています。（島村、近藤、松島）

本人は、FSJG のほとんどの外部仕事を選択し行きました。どこに行ってもごく普通に接してもらえ、一日の仕事を終えた時にはスタッフの皆さんから感謝の言葉をもらえ、笑顔で帰宅していました。そのような対応が「人の役に立っている」「できる」につながり嬉しかったのだと思います。現在本人はパソコン入力の仕事にめぐまれ FSJG を卒業しました。（稲原）

外部仕事に行きだしスタッフと親しく話すうちに、関心のあるものをもっと知りたいと言葉に興味をもち、語学を学びたいと「学ぶ」を選択した本人は、就労だけでないいろいろな社会参加があることを示してくれました。将来、好きな得意な語学を生かして活躍を！と思うと同時に、さらなる選択肢の拡大につながる仕事の開拓を一層していきたいと思います。（親一同）

勉強会参加者の声

FSJG の勉強会に参加した時、「社会を家の中に入れる」という言葉がとても心に残りました。当時、我が子は、ひきこもりの真っ最中、昼まで寝て暗い顔をして一日を過ごしていました。まずは家族の一員として今を認めてあげなければいけないと思ってはいましたが、それを本人にどう伝えればいいのかわかりませんでした。早速、仕事をして対価を得る（社会的行動）という考えを家族に話すと賛成してくれたので、最初は週１回、家族でジャンケンをして家事手伝いを決めることにしました。何回か繰り返すと、本人はトイレ掃除ばかりを選ぶことが分かったので、改めてトイレ掃除を仕事として対価（お金）を支払うことにしました。仕事とすることで「家族の一員としてあなたもここにいるよ！家族の役にたっているよ！」というメッセージを込めたつもりです。その後、家事手伝いを増やすことで仕事内容が発展していくようにと考えました。親の思い込みで、これができない、あれもできないと思うより、今、本人のできる事を見つけたり、今はできなくても少し手伝ったり楽しく工夫していくことで、できることを認めていくことが大事だと思います。今、ひきこもりから抜け出した本人は、「仕事（家事手伝い）することでお金を得たことがとても大事だった」と言っています。

かつて私は、なぜ居場所を通らずに FSJG の当事者たちが比較的短期間で社会へ出ていけるのかと疑問に思っていましたが、身近にいる親が子どものできることを見つけ、それを仕事とし、子どもはその仕事をしてお金を得ることによって、人とつながり、行動が広がることを考えれば疑問も解けました。FSJG のこの考え方、やり方は、ひきこもりの子を持つ親には良い参考になると思います。（S.Y）

FSJG あゆみ

2002年　春　代表上田が、「ファーストステップ・ジョブグループの提案」を機関誌『Kids』誌上、援助職者講演会等で提示し、日本行動分析学会ニューズレター（2002年28号）で概要を紹介し、参加者を募る

2002年　８月　ファーストステップ・ジョブグループ結成

2003年　３月　日本行動分析学会ニューズレター（2003年冬号）:「シリーズ現場を行く：『ひきこもり』援助の現場から：ファーストステップ・ジョブグループの試み」に経過報告と方法論を発表

2003年12月　機関誌『Kids』（ドーナツトーク社）に経過報告

2004年　９月　２周年活動報告会

2004年11月　パネルディスカッション「社会的ひきこもりからニートへ、しかし、本来的意味としてのひきこもりは今も長期化している」討論

2004年11月　NPO法人ユースサポートネットとも連携開始

2004年12月　成人実用基礎教育研究会講演「ニートと若年者の就労支援の現場から」（A´ワーク創造館主催）

2005年　７月　NPO法人きょうとNPOセンターと連携開始

2005年　８月　本『分岐点に立つひきこもり―社会的ひきこもりからニートへ？しかし、本来的意味としてのひきこもりは今も長期化している』共著（ドーナツトーク社）

2005年10月　自主公開企画講演会：「いつでも最初の一歩」

2006年　１月　大阪府健康福祉部精神保健福祉担当職員京阪ブロック研修講演「ひきこもり支援のための社会資源について理解を深める」

2006年　２月　立命館大学特別公開企画「当事者と共に創る対人援助学」において実践報告

2006年　８月　家族対象勉強会：連続講座「親としてできることは…」

2007年　１月　枚方保健所ひきこもり家族交流会講演「本人とのかかわりについて話し合おう」

2007年　３月　自主公開企画座談会：「脱ひきこもり支援：確認されたもの・続けたいものについてみんなで語ろう」

2008年　２月　家族対象勉強会：連続講座「親としてできること家での対応」

2008年　３月　ボランティア・市民活動フェスタ（京都市市民活動総合センター主催）

2008年11月　NPO法人サンフォレスト（静岡）講演会：「ひきこもり支援方法を広げよう―ファーストステップ・ジョブグループの経験から学ぶ―ファーストステップ・ジョブグループの方法と展開」

2009年　２月　自主公開企画講演会：「今、必要な援助～『脱ひきこもり支援』FSJGの活動から見えたこと～」

2009年　３月　藤井寺保健所精神保健福祉研修会講演：「ひきこもりの理解と支援―ファーストステップ・ジョブグループの取り組み」

2009年　６月　家族対象勉強会：連続講座「対応を学ぶ」

2009年　９月　講演録「ファーストステップ・ジョブグループ（ＦＳＪＧ）：対人援助学的『脱ひきこもり』支援」発行（立命館大学人間科学研究所）

2009年12月　NPO法人テラ・ルネッサンスとの協働事業開始

2010年　７月　ギャラリー当番ボランティア（ユースサポートネットとも連携）

2010年11月　家族対象勉強会：連続講座「どう対応すればいいのか、対応を学ぶ」

2011年　１月　サロン「茶話会マチナカ」開始（カフェ＆ギャラリーアトリエとも協力）

2011年　２月　自主公開企画講演会：「今一度、ひきこもりの理解と支援を考えるーいつからでも・どこからでもー」

2011年　６月　家族対象勉強会：連続講座「ひきこもり当事者本人に対しての家族の対応を学ぶ」

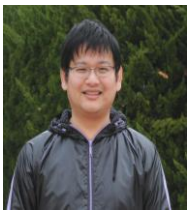
2012年　１月　家族対象勉強会：連続講座「『ひきこもり』に対しての家族の対応を学ぶ」

＊活動に賛同してくださる皆さまへ　＊ご支援いただければ幸いです。

振込先　ゆうちょ銀行　　店：４４８（ヨンヨンハチ）普通：口座番号：４９１０７７１

口座名：ファーストステップ・ジョブグループ

第三者から観たFSJG



＜ これまでのシゴトとこれからのシゴト ＞

公益財団法人
京都地域創造基金　理事長　　深尾　昌峰

ファーストステップ・ジョブグループの取組みは、その時々の社会が気づけなかった問題を当事者が動く事によって社会に表出させてきました。加えて、この取組みの特徴は、当事者だけで閉じずに外部資源とつながっていくことで、少しづつ新しい境地を切り拓いてきたといえます。立命館大学の研究、NPO との連携した取組みを確信的、戦略的に結びつけてきた成果といってもいいでしょう。この報告書でもわかるように一定の成果は上がってきました。しかし、当事者性という側面からすると、立ち止まる必要は当然ながらありません。もう少し踏み込んで言えば、「社会の要請」に応えるよりも「我が子」のライフデザインをどう豊にしていけるかにこだわった今後の展開を模索したほうがいいと考えます。

団体名をもじって考えさせてもらうならば、セカンドステップ、サードステップをどういう風に考えていくかということです。もう既に FSJG の皆さんには見えている次のステージにそろそろ歩みを進めて欲しいと思います。どうしても活動が広がってくると「我が子」は後回しになってしまいがちです。また、ファーストステップを卒業した方には、次の課題が待ち受けているのも事実だと思うのです。そこに是非、コマを進めて欲しいと思います。それは決して我が儘ではなく、創造的取組みであると思います。

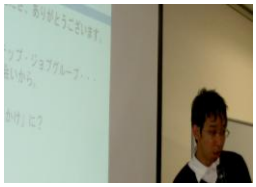
一方で、この＜働く＞を中核においたファーストステップ・ジョブグループの経験を私たちの社会はどう引き取り、活かすのかを考えなければいけません。ファーストステップ・ジョブグループが NPO と取組みを進める中で見えてきたのは、ひきこもった当事者が社会とつながりを再び獲得していく際に有効に機能したのは、ボランティアワークであったことです。この労働とも単なる趣味活動とも違う中間の領域が有効に機能したことに、私は思考が刺激されます。

ファーストステップ・ジョブグループが明らかにしてきた地平には、ひきこもりに留まらない、生きづらさを抱えている人々、生きづらい社会を生きている私たち全てに関わる問題の処方箋の一端が見えてきます。言い換えれば、ファーストステップ・ジョブグループの取組みの成果は、様々な形で応用可能であり、課題解決に対峙する「民のチカラ」を引き出すということです。例えば、私たちが今、この経験をベースに取組み始めているのは、若年性認知症の方の＜働く＞場づくりです。＜働く＞ということは単に貨幣的報酬を得る手段のみならず、尊厳をもって社会に参加することができる機会でもあります。この貴重な実践を下敷きにした新たな取組みは、特に課題に向き合っている市民活動団体や当事者にとって急務の課題です。ファーストステップ・ジョブグループのこれまでの実践に改めて学びながら、新たな領域創造に私自身も微力を尽くしたいと思います。

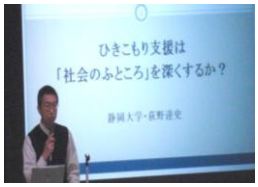
講演会講師の皆さま

田中俊英氏（ドーナツトーク社）
2005 年

中村正氏（立命館大学）
2007 年



川北稔氏（愛知教育大学）
2009 年



荻野達史氏（静岡大学）
2011 年

FSJG

ファーストステップ・ジョブグループ(ＦＳＪＧ)事務局
〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-１
立命館大学人間科学研究所　気付
TEL：090-9253-7052
Ｅ-mail：yyn-yoko.kcn.ne.jp
ホームページ　ファーストステップ・ジョブグループ　検索
ブログ　http://blog.canpan.info/fsjg2/

発行日：２０１２年７月３１日
発行所：ファーストステップ・ジョブグループ

※本書の一部またはすべてを無断で複写、転載引用することを固く禁じます。